

神を愛する者として生きる

マルコ 12:28~34

今年の指針は「神を愛する者となる」で、聖句として「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」ローマ 8:28 をあげました。聖書の箇所は違いますが説教題は今日の題もほぼ同じです。今年はコロナ禍のこともあり、元旦礼拝を持ちませんでした。ですから今年初めて今日礼拝にご参加の方もおられることと思います。今年、互いに祈り祈られながら神を愛する者となり、神を愛する者として生きてゆきたいと思います。

さて聖書には、数多くの戒めがありますが、それは、十の戒め、「十戒」に要約することが出来ます。十戒というと、「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。」などという否定的な戒めの羅列のように思われがちですが、実際はそうではなく、十戒の前半は神への愛、後半は人への愛を教えています。主イエスは、この十の戒めをさらに要約して、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」の二つにまとめられたのです。最初の戒めは申命記から、次の戒めはレビ記から取られていますが、この二つは別々のものではなく、「愛する」ということばでつながっています。人を愛する愛は、神を愛する愛から出てくるものなので、この二つの戒めは切り離すことはできません。神は、人間を、神を愛し人を愛する者として造られました。神を愛し、人を愛することが、私たちに与えられた人生の目的なのです。ただ人生の目的、目的とは方向、向きのことですから良い方向に行っているからと即時的に命中するとは限りません。今日の主イエスに尋ねた律法学者も模範的な答え、賢い返事をしながらも「あなたは神の国から遠くない。」と言われていました。つまり良い方向に飛んで近いけれども、当たってはいませんと言われたのです。

神は、ユダヤの人々を神の民として選び、彼らに神を愛することを教えました。ところが、ユダヤの人々は、心を尽くして神を愛することを、神の戒めの表面を守ることにすりかえてしまいました。定められた日に、決まったことをし、それを後生大事に守ることがすべてとなり、神への愛や人への愛を忘れてしまっていたのです。主イエスは、そうしたユダヤの人々に『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。」マタイ 9:13 と言われました。つまり、どんなものを捧げるか、よりもどんな心で捧げるかの方がはるかに大切なことと言われたのです。ユダヤの人々は幼いころから律法を学んでいました。イエスの教えるようなことは、言われなくてもみな知っている、思っていたのです。しかし、彼らは、頭では分かっている、実際には、聖書の意味するところを少しも理解していませんでした。理解がそうなら行動もそれに伴ったものとなります。イエスは彼らに、「あなたがたは、ぶよは、こして除くが、らくだはのみこんでいます。」マタイ 23:24 とも言われました。日本語には「重箱の隅をつつく」ということばがありますが、彼らは、神のことばの枝葉のことにこだわって、神のことばのいちばん大切なこと、基本的なことを見落としていたのです。キリスト教的なこととはよく知っているけれどもキリストご自身については知っていなかったのです。

けれども、私たちは、イエスの時代のユダヤの人々を笑うことはできません。日本人もまた、形式や伝統を重んじます。中身よりも外側のものにこだわって、いちど形を作ってしまうとそれをなかなか変えようとはしないのです。形式だけではなく、物の考え方もなかなか変えようとしません。古い考え方がいつまでも幅を効かせています。おそらく、日本の宗教には、「神を敬う。」ということばはあっても、「神を愛する。」ということばはなかったのではないかと思います。しかも、「神を敬う。」と言っても、それは、神を神棚に奉っておくという意味でしかありません。神棚に供え物をし、お勤めを欠かさなければそれでいいのであって、聖書で言うように、神を慕い、神を想うということがないのです。神社で拍手を打ち、神棚に手を合わせる時、心にあるのは、「家内安全、商売繁盛、無病息災、受験合格」などの自分の

願い事であって、神のことではありません。神に心を向け、他人のことを祈っていたら自分のことは後回しになってしまうと考えているのです。そんな宗教的な背景を持っている私たちですから、クリスチャンになって「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」と言われても、神を愛するとはどういうことなのかがすぐには分からないのは無理もないことかもしれません。

聖書は、どんなに厳格に宗教の形式を守るよりも、立派な行いをするよりも、また忙しく動き回るよりも、主を愛することが、第一のことでなければならぬと教えています。使徒パウロは、コリント人への第一の手紙で、たとえどんなに知識があり、信仰があり、全財産を人々に施したり、また殉教するようなことがあっても、愛がなければすべてはむなししいと言います。コリント第一 13:1-3、「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。」（コリント第一 16:22）とさえ言っています。主は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」また、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということ、私たちにあっていちばん大切なこととし、これを人生の目的にするよう命じておられます。あなたはそれを人生の目的としているでしょうか。

しかし、どうしたら、私たちは神を愛することができるようになるのでしょうか。それは、神に愛されることから始まります。まず、神が私を愛してくださいました。その愛を受け入れた時、私たちのうちに、神の愛が注ぎ込まれました。私たちは、その愛によって神を愛し、人を愛するのです。私たちが神を愛する愛もまた、神から出たものなのです。ヨハネの手紙第一 4:7に「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。」とある通りです。

ヨハネの手紙は「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。」と言っています。イエス・キリストは神のひとり子です。「ひとり子」という言葉は、イエス・キリストが神にとってどんなにかけがえのないお方であることを示しています。神は、私たち人間を愛して神の子どもとし、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。」イザヤ 43:4 と言ってくださいました。神が、罪の中から救い出して神の子どもとした者たちに対してでさえ、国々をその代わりに差し出しても惜しくないと言われるのなら、神の御子、ひとり子イエス・キリストのために全世界を、いや全宇宙を与えても不思議ではないはずで、ところが、神は、イエス・キリストに全世界を与えたのでなく、イエス・キリストをこの世に与えたのです。神は、御子のために人間を犠牲にしたのではなく、人間のために神の御子を犠牲にしたのです。これはなんという逆説でしょうか。しかし、ここに愛があります。ここに神の愛が表わされています。

神は、私たちが神を信じた時はじめて私たちを愛してくださいましたというわけではありません。私たちがまだ罪人であった時、神を愛さなかった時、神の敵であった時から、神はすでに私たちを愛してくださいました。神は、私たちの状態にかかわらず、無条件の愛で私たちを愛しておられます。聖書は「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」と言っています。ここに愛があります。キリストの十字架に神の愛があります。

神がこんなにまで、私たちを愛しておられるのに、なぜ人々はこの神の愛を受け入れないのでしょうか。聖書は、人間の傲慢が、神の愛を受け入れるのを妨げていると教えています。人間は、いつも自分を誇りたがります。自分では自分を救うことができない、神の愛によってしか救われぬのに、「神が私を愛してくださいましたのは、私が宗教の規則を守ったからだ。」「神が私を愛してくださいましたのは、私が良い行いをしたからだ。」というように、人間の側の何かの功績を誇りたいのです。あるいは愛されるためには何か理由があるはずだと考えるのです。ですから、神の愛が無条件の愛であるというのは、人間の側からすると正直、少し困惑するわけです。よく「私のような罪人を、神が愛してくださいましたなんて、申し訳ない。

すこしは良い人間になってから、救いを受け入れましょう。」と言うのを聞くことがあります。謙遜そうに聞こえますが、実際は、神の前には高慢なことばかも知れません。神の無条件の愛を条件付きの愛にしているからです。あなたをありのままに愛していると神は無条件の愛をお語りになっているにもかかわらず、「すみません、こんな自分で」とか「こんな私に神様は愛想を尽いたと条件付きの愛を持ち出すのです。自分で良い人間になれないからこそ、キリストの救いが必要です。神の無条件の愛、十字架の愛でしか、救われないことを知っているなら、どんな条件もつけずに、十字架の救いを、神の愛を受け入れるはずではないでしょうか。神を、人を信頼出来ない人はどこまでも「こんな私が救われるはずがない」「あんな人が救われるはずがない」と言い続けます。神を愛するとは神を信頼すること。

イエスとともに十字架にかかった強盗でさえ、イエスに救いを願った時、天国を約束されました。イエス・キリストの愛は無限に大きいのです。この無条件の神の愛に、私は罪人です。私には救いが必要です。あなたの愛が必要だと、どんな条件もつけず、謙虚に神の愛を受け入れる、それが、十字架に示された神の愛に応える唯一の道です。そのように神の愛を受け入れる時はじめて、私たちは、神を愛することが何であるかを体験として知ることができ、ほんとうの意味で人を愛することができるようになるのです。イエス・キリストは言葉だけで「神を愛せよ。」「人を愛せよ。」と教えたお方ではありません。キリストは神を愛して十字架への道を歩み、私たちを愛する愛のゆえに十字架の苦しみを耐え忍ばれたお方です。このお方を、この愛を、今、あなたの心に、あなたの生活に迎え入れようではありませんか。これが神を愛する者として生きることなのです。